

# 滋賀県におけるチャネルキャットフィッシュの生息状況と今後の対策

石崎 大介

(滋賀県水産試験場)

## はじめに

チャネルキャットフィッシュは北米原産で特定外来生物に指定されている。琵琶湖および瀬田川では2001年に初めて確認され、その後2007年までは3個体のみ確認であったが、2008年から瀬田川洗堰（以下、洗堰）下流（以下、瀬田川下流）で毎年継続して確認されるようになり、2022年以降は確認数が極めて多くなっている。そして2018年から洗堰上流の瀬田川（以下、瀬田川上流）でも毎年継続して確認され、2019年には確認数が激増した。そのため2019年から瀬田川上流やその周辺において滋賀県漁業協同組合連合会（以下、漁連）による駆除事業が実施されている。

## 瀬田川上流での生息状況

瀬田川上流での生息状況を把握するために2019年から概ね3～12月に、延縄を用いて調査を実施した。延縄はエサにアユを用い最大針数360本を仕掛け翌日引き揚げた。そして針100本あたりの採捕個体数を算出してCPUEとした。加えて、漁連による延縄を用いた駆除事業の結果についても同様にCPUEを算出した。そして月ごとの平均CPUEを算出して各年の傾向を比較した。また、これらの調査や駆除事業で採捕された個体の標準体長を測定してヒストグラムを作成した。その結果、2020年を除いて毎年1歳魚とみられる幼魚が発生しているものの、長期にわたり本種の採捕が少ない時期が存在し、駆除事業の効果があるものと考えられた。しかしながら、体長400mm以上の成魚が洗堰の全開放流後に採捕される事例が散見されることから、確認数の多い瀬田川下流から全開放流とともに遡上した成魚が、瀬田川上流で産卵することにより幼魚が発生していると予想される。

## 瀬田川下流での移動状況

瀬田川下流での本種の移動状況を把握するために、洗堰から1.5km下流までの水域において2023年4～11月に針280本の延縄を用いて調査を実施し、前述と同様にCPUEを算出した。その結果、CPUEは6～7月に上昇し、その後は徐々に減少した。ただし8月のCPUEは低かった。採捕された個体の標準体長を測定したところ6～8月は成魚に近いサイズが多く採捕されていた。これらのことから、洗堰下流では産卵期かつ増水期である5～7月に比較的大型のサイズが下流から遡上して洗堰下流に留まっていると推測された。また8月の調査は7月の調査時から洗堰の放流量が少ない状態が続いており、新たにこの水域に侵入した個体が少なかったため、CPUEが低下したと推測される。このことは連続して採捕を繰り返すことにより、本種の生息密度を低下させられることを示している。

## 今後の対策方針について

瀬田川上流では下流から侵入した成魚の産卵による幼魚の発生がみられるが、現状の駆除事業により採捕数は抑制されていることから、駆除事業を継続していく必要がある。一方、瀬田川下流では5～7月の産卵期かつ増水期に洗堰の直下に遡上し、全開放流までは留まっていることから、この時期に集中的に駆除を実施し上流側への侵入を防いでいく必要がある。